西川潤著

『世界経済入門　第３版』

岩波新書　2004年　238ページ

大門（だいもん）　毅（たけし）

本書は，1988年の初版以来，91年に改訂され，そして2004年に大幅改訂が行われたものである。「人間のための」経済学にこだわりを持つ著者は，混迷を極める現代国際社会の中で「平和」，「人権」，「平等」，「環境」に配慮した国際経済のグランド・デザインを描き，日本の進むべき道を示している。新版の特徴は以下のとおりである。

まず第１に，国際経済の様々な重要な課題について，入門者にも分かりやすく説明している点である。そのアプローチは類書にありがちな，経済理論から出発した現状分析ではなく，統計資料・データを駆使した綿密な現状分析に基づく経済理論を論じているという点で首尾一貫しており，地に足のついた議論を展開している。扱う分野も，人口・食料問題から，国際テロリズム・軍事問題まで幅広い。

第２に，1990年代の後半以降，顕著になってきたグローバル化現象の持つ「光と影」を浮き彫りにするために，「経済のグローバル化」と「意識のグローバル化」という概念整理を行いつつ問題を提起している点であり，評者の知る限り初の試みである。グローバル化を経済の問題のみならず，市民社会の意識の問題として捉えることによって複雑化する国際政治経済を理解しようと試みている。

第３に，国際経済の当事者としての市民社会の役割，特に，平和構築に関するその役割が重視されている点である。市場・国家では達成できない，国際社会の公益を追及するため，非政府組織の役割が重要であるという，初版からのこの主張を，混迷を極める9.11後の世界において著者は今一度強調している。

本書は３部構成になっている。

第Ⅰ部「21世紀初頭の世界経済」（１　グローバル化と地域化／２　貿易の流れと自由貿易協定／３　多国籍企業と海外投資／４　国際通貨体制と円）においては，グローバル化を「市場」，「情報」，そして「意識」レベルに分け，それぞれの力学の作用・反作用が「南北格差の拡大」および市民社会・テロリズム・地域主義にみられる「反グローバル化」の現象としてあらわれていると把握している。テロリズムに対しては，著者は「意識のグローバル化，地球市民意識の涵養による平和形成の展望」（16ページ）に解決の鍵があると説く。そのうえで，グローバル化の担い手である貿易，投資，国際通貨体制の歴史的変遷と現状，今後の課題について分析を行っている。

第Ⅱ部「地球経済の諸要因」（５　世界人口はどうなる？／６　食料問題のゆくえ／７　エネルギーと資源／８　工業化と公害・環境）においては，人間と自然が共生する地球が持続するためには，20世紀型の大量生産・消費時代からの大胆な発想の転換が必要であるとしている。人口，食料，エネルギー資源，環境領域などの問題は，先進国・開発途上国を問わず直接影響を受けるものであり，人々の生存にとって脅威である故，地球市民が団結して共同して取り組まなければならない，いわば「意識のグローバル化」が求められる課題であるとする。

第Ⅲ部「世界経済の将来と日本」（９　南北問題と地域秩序／10　グローバル化，軍事化と市民社会／11　新しい豊かさを求めて――日本の選択――）では，グローバル化の影の部分として，「市場の失敗」と「政府の失敗」の拡散により，南北格差の拡大，民族紛争・テロリズムが悪化していることに警鐘を鳴らし，問題解決のためには非営利・社会連帯動機によって行動する市民社会の役割が重要であるとしている。しかし，市民社会も万能ではなく「市民社会の失敗」（212ページ）の可能性を指摘する。そのうえで，日本は「意識のグローバリズムの立場に立ち，経済グローバル化を身の回りでコントロールしつつ，平和と人権と社会的連帯の新たな発展の道」（238ページ）を希求すべきであると結論づけている。賛否はあるだろうが，本書は一読に値する。

（早稲田大学国際教養学部助教授）